5世紀の朝鮮半島西南部における竪穴式石室・竪穴系横口式石室の構造

Structure of Pit-Type Stone Chambers and Pit-Type Stone Chambers with Side Entrance in the Southwestern Part of the Korean Peninsula in the 5th Century

高田貫太

TAKATA Kanta

はじめに
❶検討資料の提示
❷5世紀前半の竪穴式石室，竪穴系横口式石室
❸5世紀後葉～6世紀前葉の竪穴系横口式石室
❹竪穴式石室，竪穴系横口式石室の受容と展開
おわりに

【論文要旨】

5～6 世紀前葉の朝鮮半島西南部には，竪穴式石室や竪穴系横口式石室が展開する。これらは，伝統的な木棺や甕棺とは異なる外来系の埋葬施設であり，その受容や展開の背景について検討することは，当時の栄山江流域やその周辺に点在した地域集団の対外的な交渉活動を，微視的な視点から明らかにすることにつながる。そのための基礎的な整理として，それぞれの事例の構造や系譜について，日朝両地域の事例との比較を通して検討を行った。

その結果，5 世紀前半の西南海岸地域に点在する竪穴式石室については，日本列島の北部九州地域の竪穴式石室に直接的な系譜を求めることが可能であり，基本的には当地へ渡来した倭系集団が主体となって構築した可能性が高いと推定した。その一方で栄山江流域に分布する竪穴系横口式石室については，特定の地域に限定した系譜関係をみいだすことは難しく，むしろ嶺南地域や中西部地域，あるいは北部九州地域の石室構築の技術を多様に受け入れ，それを各部位に選択的に取り入れながら，特色のある墓制を成立させたと把握できる。5 世紀後葉～6 世紀前葉においても，栄山江流域には竪穴系横口式石室が展開している。それを採用する古墳は，前方後円墳や在地系の高塚古墳などであり，地域社会が主体的に横穴系の埋葬施設（やそれにともなう葬送儀礼）を定着させつつあったことを示している。

【キーワード】竪穴式石室，竪穴系横口式石室，構造と系譜，三国時代，日朝関係

はじめに

日本列島の古墳時代，朝鮮半島の三国時代には，倭と朝鮮半島諸勢力の間でさかんに政治経済的な交渉が行われた。その痕跡は死者を葬る古墳にも遺されており，墳丘，埴輪や葺石などの外表施設，副葬品，埋葬施設，ひいては葬送観念において，互いに影響を及ぼしあった。

近年，朝鮮半島の栄山江流域や西南海沿岸を中心とした朝鮮半島西南部において，5，6世紀代の墓制の様相が詳細に明らかとなりつつある。特に古墳の埋葬施設に注目すると，伝統的な専用甕棺あるいは木棺（土壙）以外に，竪穴式石室や竪穴系横口式石室など，倭や百済，または加耶などとの交流関係の中で築かれた外来系の埋葬施設の存在が，相次いで確認されている。本稿ではその構造について，個々の事例ごとに基礎的検討を行う。それとともに関連する類例を提示しつつ系譜関係を明らかにしてみたい。その理由は大きく2つある。

まず，倭と栄山江流域の間に積み重ねられた交渉を具体化していく上で重要な考古資料と考えられる点である。特に，検討対象とする古墳には，韓国学界において「倭系古墳[(1)]」と定義されるものとともに，在地の伝統のもとできずかれた古墳も含まれている。両者の埋葬施設の構造に認められる共通点と相違点を整理し，比較検討することで，倭と栄山江流域の錯綜した交渉関係について，微視的な視点から検討することが可能となろう。

次に，栄山江流域において，竪穴式石室や竪穴系横口式石室は基本的に外来系の埋葬施設であるという点である。その受容や展開の過程を，他の社会―百済，新羅，加耶，そして倭など―における外来系埋葬施設の受容や展開の過程を比較することは，比較考古学の観点においても有用であろう。

このような問題意識に基づく基礎的整理として，本稿では，朝鮮半島西南部の竪穴系横口式石室，竪穴式石室の構造と系譜を検討する。

❶……検討資料の提示

本稿では，検討資料をあえて，歴博共同研究「古墳時代・三国時代における日朝関係史の再構築―倭と栄山江流域の関係を中心に―」の中で，筆者が実見しえた古墳の埋葬施設に限定している。その概要と分布をまとめたのが図1と表1である。

ここで，それぞれの古墳の造営時期を，古墳出土の倭系副葬品を基準として，簡略に整理しておきたい。まず，表1の1～4に該当する高興野幕古墳（三角板革綴短甲＋三角板革綴衝角付冑），新安ベノルリ3号墳（三角板革綴短甲＋三角板鋲留衝角付冑），高興吉頭里雁洞古墳（長方板革綴短甲＋小札鋲留眉庇付冑など），そして霊岩沃野里方台形古墳1号墳（石室墓　三角板革綴短甲）では，日本列島におけるいわゆる「鋲留技法導入期」［鈴木2014］の甲冑が出土している。したがって，おおむね陶邑編年のTK73～TK216型式期の時期と推定できよう。また，表1－6の羅州佳興里新興古墳では，石室の床面形成土からTK216型式の須恵器甕が出土しており，同様の時期と考えられる。

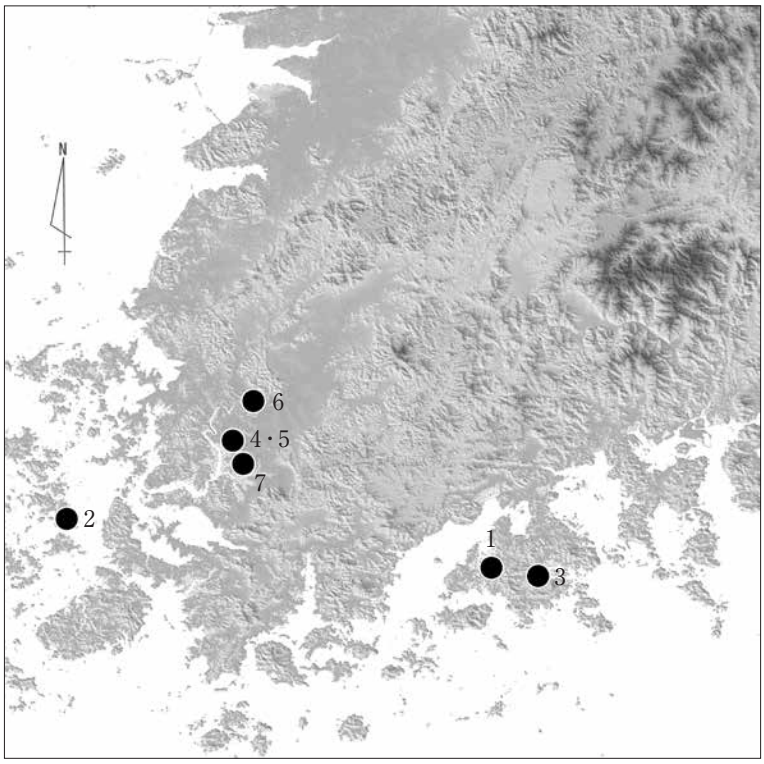

図 1　検討資料の分布（番号は表 1 と同じ）

表 1　検討資料の概要

	古墳名	墳丘		埋葬施設の型式と規模（内法）				倭系の副葬品		
		墳形	墳丘規模	埋葬施設の型式	長	幅	高さ	甲冑	須恵器	その他
1	高興野幕古墳	円	22	竪穴式石室	3.3	0.8	0.4	○		櫛，鏡，鉄鏃など
2	新安ベノルリ 3 号墳	円	6.8 × 5.3	竪穴式石室	2.14	0.56	0.7	○		鉄鏃など
3	高興吉頭里雁洞古墳	円	36	竪穴式石室	3.2	1.3 ～ 1.5	1.6	○		鉄鏃など
4	霊岩沃野里方台形古墳 1 号墳（石室墓）	方台形	36.7 × 322	竪穴系横口式石室	3	1 ～ 1.1	1.4	○	○？	
5	霊岩沃野里方台形古墳 1 号墳（石槨墓）			竪穴系横口式石室	1.7	0.59 ～ 0.7	0.5			
6	羅州佳興里新興古墳	方台形？	32.4 × 21 ～ 27	竪穴系横口式石室	2.72 ～ 2.81	1.2 ～ 1.26	1.4		TK216	
7	霊岩チャラボン古墳	前方後円	全長 37，後円部径 24	竪穴系横口式石室	3.26	2.36	1.9		TK47	

一方，表 1－7 の霊岩泰澗里チャラボン古墳では周溝から出土した土器群の中に，TK23・47 型式に比定可能な須恵器（系土器）の杯身が含まれていた。1 点のみの出土ではあるが，共伴する在地系の土器，あるいは石室内部の副葬品の時期は，それと矛盾しない。表 1－5 の霊岩沃野里方台形古墳 1 号墳（石槨墓）では倭系副葬品は出土していないが，出土土器からおおむね 5 世紀後葉～6 世紀前葉頃に，墳丘に追加して構築されたものと考えられる。

以上の整理に基づいて，対象古墳の造営時期を大きく 5 世紀前半と 5 世紀後葉～6 世紀前葉に大別することとしたい。

❷……5世紀前半の竪穴式石室，竪穴系横口式石室

1. 5世紀前半の西南海岸地域における竪穴式石室

近年，朝鮮半島の西南海岸を沿うように，竪穴式石室を埋葬施設として副葬品に倭系文物が含まれる古墳があいついで確認されている。代表的なものとしては，高興野幕古墳，同雁洞古墳，新安ベノルリ3号墳がある。いずれも詳細な発掘調査報告書が刊行されており，その記述に基づきながら，それぞれの石室構造を検討したい。

1）石室構造

① **高興野幕古墳**［국립나주문화재연구소 2014b　図2左上］

墳丘と石室の関係　墓壙は確認されず，墳丘造成と並行して竪穴式石室は築かれている。すなわち，墳丘の造成の途中で石室構築のための平坦面をもうけ，壁体の積み上げ，背後の控え積み，墳丘造成を同時に行っている。壁体上端の高さで再び平坦面をもうけて，そこで埋葬行為を行う。その後，墳丘を高く積み上げることはなく，石室は墳丘の比較的浅いところに位置する。

壁体の状況と木槨　墳丘の土圧によるせり出しを考慮しても，3，4段積まれた石室壁面が整っているものとは判断しがたい。報告書では，最下段で扁平な石を立てて置いた状況が確認できること，南東側の短壁の左右両端が平面凸字形を呈することなどから，そこに板材が差し込まれていたと想定し，石室の内部には「屍身と副葬品保護のための別途の木槨があった可能性が高い」［국립나주문화재연구고 2014b　48頁］としている。

木製構築物（木槨）を最下段の壁石と同時に設置し，それに沿わせるように石室壁体を積み上げていく構築過程は首肯しえる。また，この石室は未盗掘でありながら蓋石が確認されなかった。よって木蓋が用いられたと考えられ，木製構築物の木蓋が石室全体の蓋をかねていた可能性もある。

控え積み　壁体構築と並行する控え積みの範囲は広く，長さ5.5m，幅3mの平面長方形を呈す。控え積み石材の上面の高さはほぼ一定である。

② **新安ベノルリ３号墳**［동신대학교문화박물관 2015　図3-1］

墳丘と石室の関係　地山を掘削した掘り込み墓壙が確認されている。その深さは石室高の1/3程である。それよりも上部の壁体は墳丘造成と並行して構築されている。壁体構築後にそのまま埋葬行為を行い，蓋石を架構し，最後に石室全体を粘質土で密封している。

壁体と蓋石，控え積み　両長壁は長大な石材を最下段に置き，その上部に割石や板石を2～4段ほど横平積みや小口積みする。両短壁は板石1枚を立てており，両長壁に挟まれる関係にある。控え積みは長壁背後に1，2段程度確認された。蓋石は4枚の板石で，最も西側の石材の端が東隣の石材の下にもぐり込むので，東から順に設置した可能性が高い。

直葬　木棺などの痕跡は確認されず，被葬者は石室に直葬されたと考えられる。

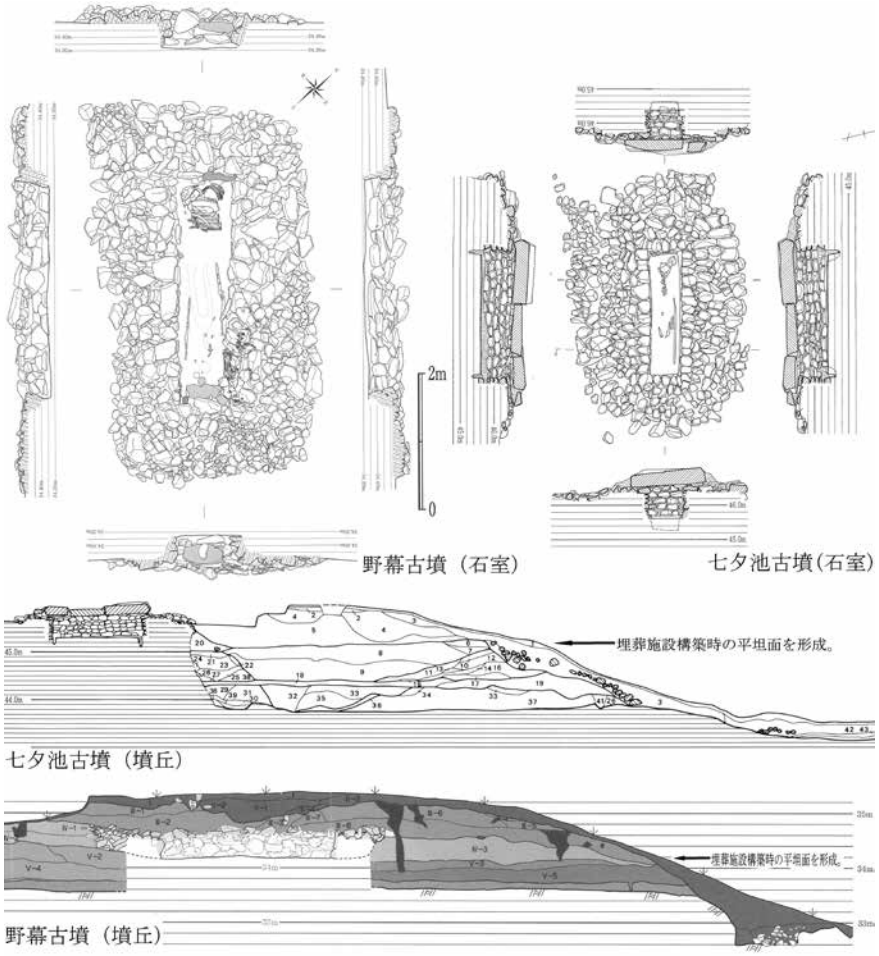

図２　高興野幕古墳と福岡県七夕池古墳

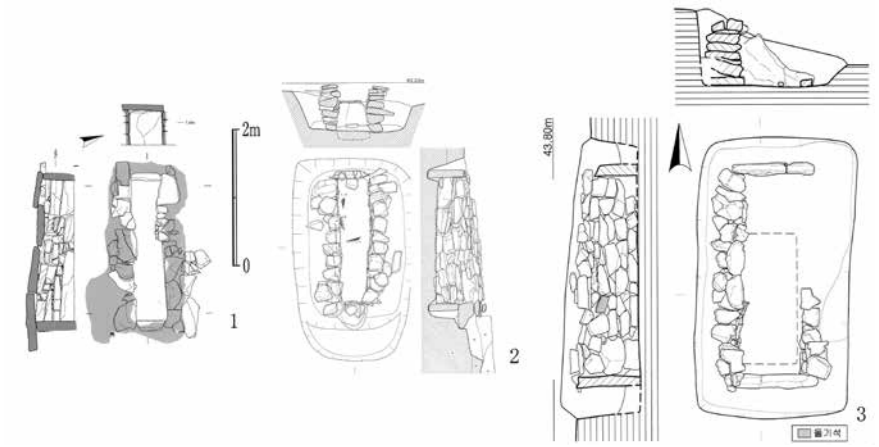

図３　新安ベノルリ３号墳の竪穴式石室と類例

1：新安ベノルリ 3 号墳　2：福岡県柿原Ｃ 16 号墳　3：燕岐松潭里 KM-020 号墓

③ **高興吉頭里雁洞古墳**［全南大學校博物館 2015　図4］

墳丘と石室の関係　盛土による構築墓壙が確認された。その規模は径9m，深さ1.6mを測り，その底面に粘質土を敷いた上に壁体をほぼ垂直に築く。壁体構築と墓壙内の盛土は並行して行われるが，壁体を高さ1m程積みあげてからは，その背後に「補強石」を積む。壁体構築後に平坦面を設けて埋葬行為を行った後，蓋石の架構，粘質土による石室の密封を行い，その上にさらに礫敷を設けている。

壁体と蓋石，補強石　石室四壁は比較的法量がそろった割石を横平積みする。土圧により内側にせり出しているが，本来はほぼ垂直に積み上げられたようである。四隅の状況から，南長壁端と東短壁端，北長壁端と西短壁端の石材が相互に組み合っており，それぞれがほぼ同時に構築されたと考えられる。また，壁面には朱が塗布された。壁体の背後の補強石は壁体上端と面をそろえており，全体の平面形は径8m程の円形を呈する。同大の板石3枚を蓋石としている。

床面の形成と木棺　石室底面に砂質粘土を敷き，さらに礫敷することで床面としている。ただし，床は水平ではなく立面でみると「⌒」字状を呈する。報告書ではこれを壁体の沈下によるものと判断している。そして床面上に棺台石を配置し，その上に木棺を置く。

2）構造の検討と類例

野幕古墳　野幕古墳の竪穴式石室の特徴は，①無墓壙で墳丘造成と石室構築が並行すること，②石室内部の木製構築物，③広範囲で平面長方形の整った控え積み，④木蓋であること，などが挙げられる。まず①については，百済圏でも燕岐松院里遺跡ＫＭ001号墓［韓國考古環境研究所 2010］のような事例があるが，石室の形状自体が大きく異なり，直接の比較は難しい。また，北部九州地域に広がる狭義の「石棺系竪穴式石室[(2)]」は掘り込み墓壙をもつものが多く，それとも区別される。③については，北部九州地域の四壁を割石や円礫で積み上げる竪穴式石室，福岡県糟屋郡萱葉2号墳［志免町教育委員会 1984］や，同七夕池古墳［志免町教育委員会 2001］，同大野城市笹原古墳［大野城市教育委員会 1985］などに認められる。そして①～③の特徴をあわせもつのが，福岡県糟屋郡七夕池古墳の竪穴式石室である（図2右上）。

七夕池古墳の竪穴式石室は墓壙をもたず，墳丘造成の途中で石室構築のための平坦面を設けている（図2の矢印）。報告書では「石室の構築方法は掘方を掘削して構築するのではなくて盛土中にベースを造り，盛土しながら主体部を造る方法を採用しているようである」と記載されている［志免町教育委員会 2001　7頁］。すなわち，この平坦（ベース）面を基底として，石室構築と墳丘造成を並行して行っている可能性が高い[(3)]。これは野幕古墳の①の特徴と共通する（図2下）。

次に②については，両短壁に板を差し込んだと推定される掘り込み（内部に板痕跡が認められるという）が確認され，また両長壁に沿うように粘土が検出された。このことから，野幕古墳と同様に壁体に接するように木製構築物（報告書では「木棺」とする）が設置されていた可能性が高い。

以上のように，野幕古墳と七夕池古墳の石室構造の相関性は高い。ただし，七夕池古墳では木製構築物に木蓋があったかは不明とされ，石室全体は蓋石で閉じている。

新安ベノルリ古墳　狭小な形状，両短壁に立てられた板石，両長壁の長大な石材，そして直葬が特徴である。このような特徴は北部九州の狭義の石棺系竪穴式石室と一致する（図3-2）。掘り込み

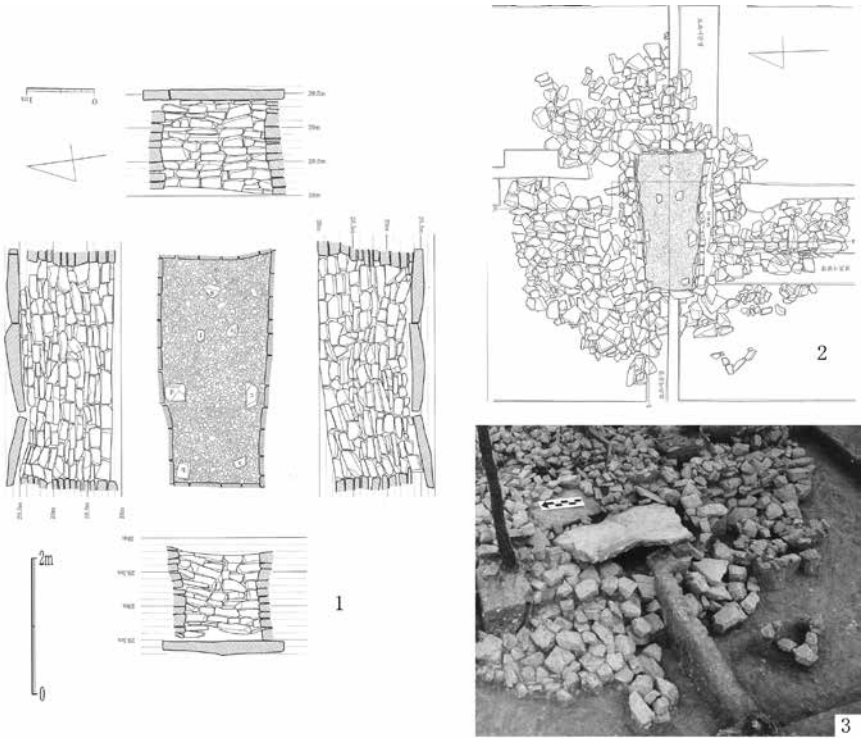

図４　高興吉頭里雁洞古墳の竪穴式石室
1：石室　2：補強石　3：西短壁背後の状況

墓壙をもつことも共通している。ただ，小石室で四壁のいずれかに板石を立てる造作は，百済圏でも燕岐松潭里ＫＭ－020号墓［韓國考古環境研究所 2010］や華城馬霞里古墳群［숭실대학교박물관ほか 2004］などの類例がある（図 3-3）。しかしこれらの石室では基本的には木棺を用いて埋葬するので，直葬のベノルリ古墳とは墓制を異にすると考えておきたい。

雁洞古墳　石室の平面形をみると全体的に幅広で，いわゆる「羽子板形」を呈している。このように「羽子板形」の平面形を定めた竪穴式石室は，管見では朝鮮半島中南部において確認できず，福岡平野を中心に分布する初期横穴式石室[(4)]との類似性が注意される（図 5）。

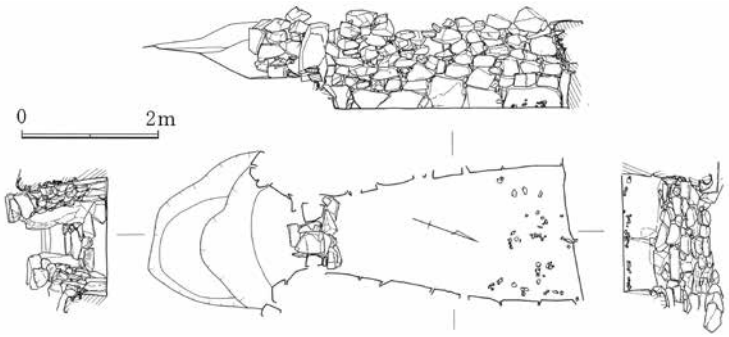

図５　福岡県カクチガ浦10号墳の初期横穴式石室

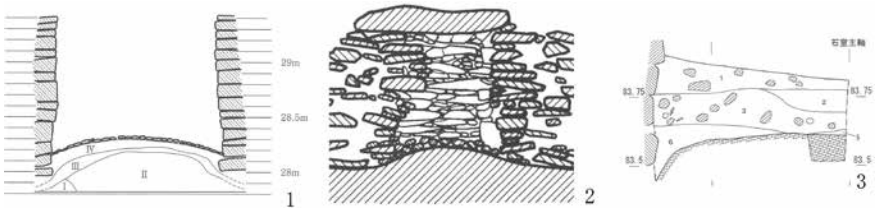

図６　床構造の比較
1：高興雁洞古墳　2：福岡県萱葉２号墳　3：岡山県天狗山古墳

また，断面形が「⌒」字状を呈する床面構造も特徴的である。報告書ではこれを壁体の沈下によるものとする。調査報告者の見解は最大限尊重されるべきだが，それでも床形成土の土層図をみると，壁体構築前にカマボコ状に床基底部を設けた可能性も考慮できる。床基底部に断面「⌒」字状の構造を持つものは，図６で類例を提示したように，５世紀代の北部九州や瀬戸内の竪穴式石室にしばしば認められる。

次に西短壁背後の補強石をみると，石列が両長壁からのびて突出している状況がうかがえる。報告書では特に北長壁からのびる石列について，平面円形の補強石を積むために最初に設置された「四壁石から十字形にのびる石列」［全南大学校博物館 2015　24 頁］と判断する。一方で，南長壁からものびる石列があるように見受けられる点，二つの石列が「ハ」字状に開く点を勘案すれば，これは墓道（作業路）の側石のような役割を果たした可能性も考えられる（図 4-3）。ただし，西短壁に横口のような箇所は認められないこと，また壁面全体に朱を塗布することを考慮すれば，墓道（作業路）があったとしても，それが実際の埋葬行為には用いられなかった可能性は高い。

2. 5世紀前半の栄山江流域における竪穴系横口式石室

1）石室構造

竪穴系横口式石室の定義や歴史的意義については，古くからさまざまな議論がある。本稿では，日朝両地域の比較という観点から，「竪穴式石室由来の構造に横口部を付設した埋葬施設」と把握する。葬送の際に実際に横口部が用いられたか否かは，ここでは問わない。そして，「天井石を有する羨道をもたず，かつ横口部の前壁が確認できない資料」に限定する［土生田 1991 など］。

韓国考古学では，類似した埋葬施設は「横口式石室」とよばれることが多い。その場合でも，「横穴式石室の埋葬法の影響をうけ伝統的な墓制である竪穴式石槨に入口を設けた」埋葬施設と評価されており［洪潽植 2001　91 頁］，この点に日朝両地域の共通性をみいだすことはできる。よって，本稿では朝鮮半島の事例においても「竪穴系横口式石室」としておきたい。

ただし，韓国考古学ではその定義に大きく２つの見解がある。ひとつめは天井石を石室に架構し，その上部を盛土で被覆した後に，横口部を用いて葬送する事例に限定して横口式石室を定義する見解［洪潽植 2001 など］である。２つめは，天井石の架構の前段階に，横口部を用いてあるいは石室の上部から被葬者（の入る木棺）や副葬品を石室の上部から納めたと想定される事例についても，（竪穴系）横口式石室として定義する見解［이영철 2015a など］である。筆者は基本的には後者の立場をとっている。

表２　各地域の竪穴系横口式石室の概要

地域	閉塞	石室構築，墳丘盛土，埋葬の基本的な順序	有袖の場合の袖のつくり方	石室平面形	墓壙	その他	出現についての評価
洛東江以東地域	割石閉塞が基本。板石閉塞はごく少数（昌寧校洞1号墳など）。	大型の石室の場合，①横口部を除いた石室壁体をきずく。②蓋石を設置する。②石室上部の墳丘を（ある程度）造成する。③墓道と横口部を通じて埋葬した後にそれを閉塞する。	割石積み	初期は細長方形（無袖）だが，ほどなく幅広（有袖）になっていく。地域ごとの多様性が顕著。	掘り込み墓壙を基本とするが，徐々に浅くなる傾向。高塚古墳の場合，墳丘の深いところに石室が位置する。	壁体に木柱をともなう例（校洞３号墳）。	横穴式石室の埋葬法の影響を受け，伝統墓制の竪穴式石槨の構造に横穴式石室の埋葬方式を応用し，横口部を設けたもの。
中西部地域	割石閉塞が基本。平面長方形（無袖）の一部に板石閉塞の可能性。	蓋石が原位置で残存する例がごく少数。蓋石の設置と横口部閉塞の順序が把握しにくい。	割石積み	幅広長方形（有袖）と長方形（無袖の2種が基本。	掘り込み墓壙を基本とする。		横穴式石室の概念が導入され，横穴式石室から変形したものという評価。一方で，入口の狭さなどから，出入口としての機能を疑問視する見解もある。
栄山江流域（沃野里１号，新興古墳，チャラボン古墳）	板石閉塞と割石閉塞	現在の資料では，①墓壙に横口部を除いた石室壁体をきずく。②墓道と横口部を通じて埋葬した後にそれを閉塞する。③蓋石を設置する。④石室上部の墳丘を造成，という順序が基本。	割石積み	長方形（沃野里と新興），幅広長方形（チャラボン）	構築墓壙（沃野里石室墓と新興）掘り込み墓壙（チャラボンと沃野里石槨墓）	壁体に木柱をともなう例（沃野里石室墓と新興）。	横穴式石室の埋葬観念を基本的に認知していた集団による築造。通有の横口式石室とは埋葬過程が異なる点を重視。
北部九州地域	板石閉塞が基本。	①墓壙に横口部を除いた石室壁体をきずく。②蓋石を設置する。③おそらくその上部に墓壙上端とおなじ程度の高さまで盛り土をする。④墓道と横口部を通じて埋葬した後にそれを閉塞する。ただし，②・③と④の順序が逆転する可能性がある事例も見受けられる。	初期は割石積みだが，ほどなく板石を袖石として設置することを基本とする。	基本的には長方形だが，地域ごとの多様性が顕著。	掘り込み墓壙を基本とするが，その深さは地域によってさまざま。	腰石の発達。	初期横穴式石室の範疇で把握されることが多い。初期の大型横穴式石室（A型）の形成に対応して，「本来竪穴式石室であるものの小口を開口させて横口閉塞する」（小田1980）小型の石室（B類）として評価。

以上の点を認識しつつ，先学の多大な成果［代表的なものとしては，小田1980，亀田1981，柳沢1982，土生田1991，重藤1992・1999，朴廣春1988，洪潽植1993・2005，曺永鉉1994，崔完奎1997，최영주2013など］を最大公約数的に整理して，朝鮮半島の洛東江以東地域，中西部，栄山江流域，そして北部九州地域の竪穴系横口式石室の概要をまとめておく（表2）。近年，栄山江流域においても竪穴系横口式石室の確認が相次いでおり，すでに非常に詳細な報告書が刊行された。以下，その成果に基づきながら，構造の特色と類例について検討する。

① 霊岩沃野里方台形古墳１号墳（石室墓）［국립나주문화재연구소2012・2014a　図７左］

墳丘と石室の関係　ほぼ石室の高さに対応する形で，粘土塊を用いて築いた構築墓壙が確認された。横口部となる南短壁の背後では，石室床面から1m程の高さまでは典型的な墓壙である一方で，それより上部では緩やかな傾斜をなす粘質土層が確認され，墓道の埋め戻し土と判断される。

壁体の構造と横口部　両長壁に沿うように４本の木柱痕跡が確認され，壁体構築のための木製構築物の存在が想定されている。壁体は扁平な割石の小口積みを基本とする。四隅をみると，床面から1m（6段ほど）程までは隣り合う石材がかみ合っているので，四壁が同時にきずかれたことがわかる。それより上部は両長壁と北短壁は同時にきずかれたようだが，南壁では両長壁とはあまり

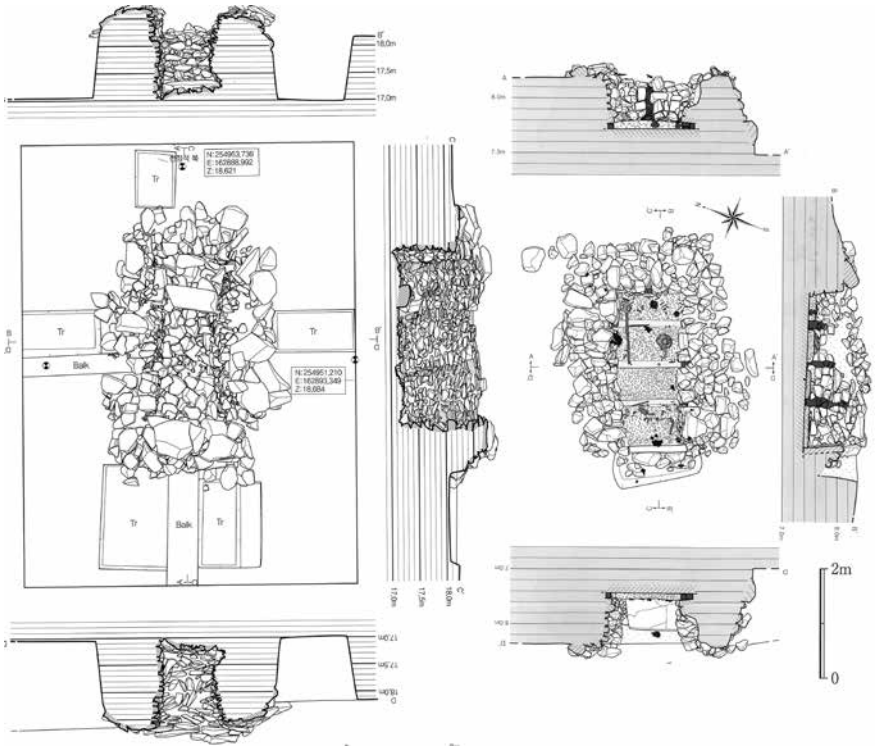

図7　霊岩沃野里方台形古墳1号墳（石室墓　左）**と羅州佳興里新興古墳**（右）**の竪穴系横口式石室**

かみ合わず粗雑な積み方である。報告書ではこの南壁部分を横口部と想定している。ただし，その中でも中央部の「65 × 75（cm）の範囲」が壁石の崩落が著しいとされている［국립나주문화재연구소 2012　178頁］。これは南短壁の写真［同197頁の写真96　図8左上］でも観察できる。

埋葬の過程　報告書では，壁体構築後に墓道と南短壁の横口部をもちいて屍身を安置した後に横口部を閉塞。その後，蓋石を設置し，粘質土で墓道と石室上部を一度に密封したと判断する。この点については，後に改めて検討する。

③ **羅州佳興里新興古墳**［大韓文化財研究院 2015a　図7右］

墳丘と石室の関係　土手状に盛土をした構築墓壙が確認された。その深さは石室高の3分の1程度と浅い。その底面を整地した後に，粘土塊を用いた墓壙内盛土と並行して石室を構築する。横口部となる西短壁の背後では緩やかに傾斜をなす砂質土層が確認され，墓道の存在が想定されている。

壁体の構造と横口部　両長壁に3本の木柱，それをつなぐように床面に3本の横木，そして東短壁に1本の木柱の痕跡が，それぞれ確認された。壁体構築のための骨組みのような構築物が想定されている。ただし，木柱の間に板材が存在し，それに沿わせるように壁体を構築した可能性も残される［이영철 2015a］。両長壁と東短壁の隅をみると，隅角がはっきりとしているが，一部に組み合う部分もみられ，おそらく同じ工程の中で三壁は築かれたようである。一方，西短壁では，両長壁の西端に板石1枚を立てて横口部を設ける（図8左下）。板石の北側と北長壁の隙間には割石を充てんする。板石の背後にはそれを支える裏込石も確認された。

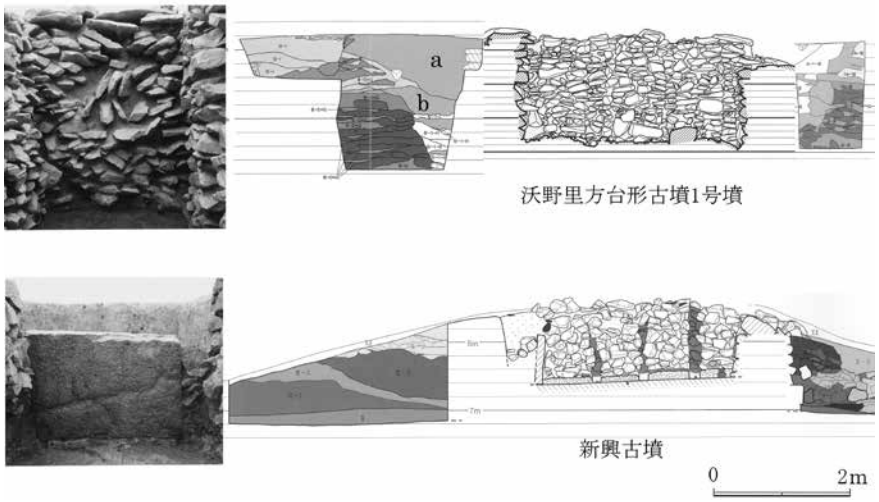

図８　墓道部の土層断面図と横口部の状況

埋葬の過程　報告書では，①両長壁と東短壁を構築，②基底面の横木の間を礫敷で充填し床面を形成，③石室内で木棺を鋏と釘で組み立てながら，墓道をもちいて屍身を安置する。④西短壁の横口を板石で閉塞し，⑤蓋石を設置する。以上の過程が想定されている。この点も後に検討する。

2）構造の検討と類例

以上のような構造を有する沃野里１号墳と新興古墳は，いずれも「竪穴系横口式石室」と定義することが可能である。その構造には共通する部分も多いので，ここではあわせて検討する。その特徴は，①構築墓壙，②石室内の木柱や横木，③横口部の構造，④埋葬→横口部閉塞→蓋石設置という順序などがある。

壁体の木柱　この中で②の木柱については，昌寧校洞３号墳［東亜大学校博物館 1992］，大邱城下里三国時代封土墳［대동문화재연구원 2012］，咸陽白川里１－３号墳［釜山大学校博物館 1986］，長水三峰里８号墳［전주문화유산연구원・장수군 2015］，金海良洞里 93 号墳［東義大学校博物館 2008］などの類例が指摘されている。校洞３号墳は竪穴系横口式石室で，それ以外は竪穴式石室である。その分布をみると，洛東江以東，下流域，以西地域と点在している状況で，管見では朝鮮半島中西部に類例は見当たらない。ただし新興古墳で確認された石室床面の横木については，同様の機能かどうかは別にして，華城馬霞里古墳群の石槨墓などで横木の存在が想定されている。日本列島にこのような構造は確認できない。

横口部の構造と閉塞　次に③の横口部については，沃野里１号墳の場合，南短壁が下段と上段に区別され，その上段が横口部と判断されている。ただし，中央部の壁石の崩落が著しい「65 × 75（cm）の範囲」が横口部であり，追葬の後に閉塞されたとする見方もある［이영철 2015a］。その場合，上段の両側に袖部が設けられていたことになる。筆者もこの見方に同意する。

このような横口部に石積みの袖部を有し，かつ割石で閉塞を行う類例は，原州法泉里４号墳［国立中央博物館 2000　図 9］など朝鮮半島中西部地域や，洛東江以東地域（昌寧，梁山，尚州など），

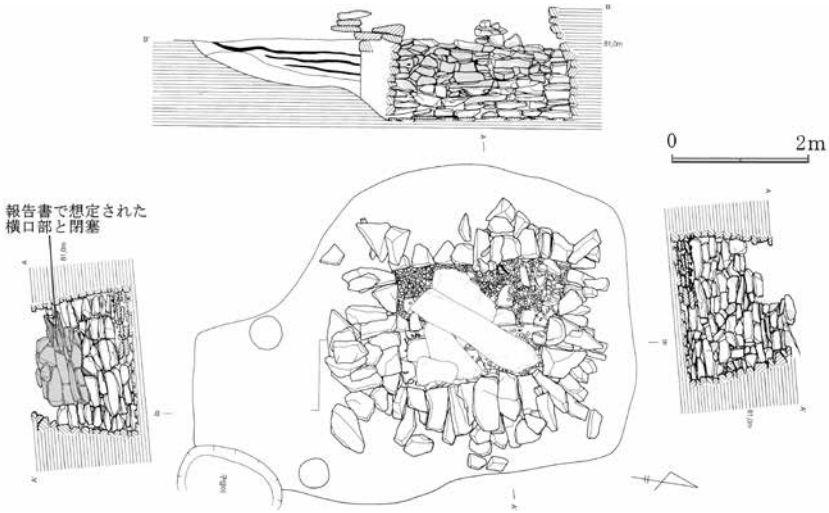

図９　原州法泉里４号墳の竪穴系横口式石室

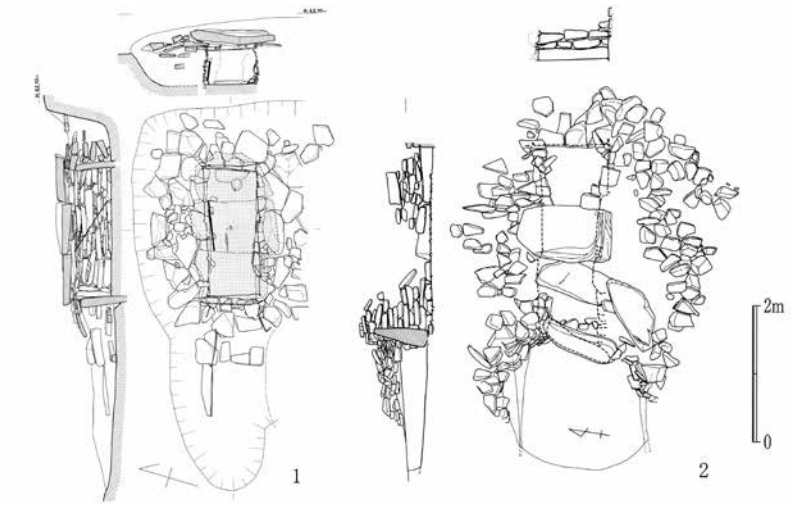

図 10　横口部のほぼ全面を板石で閉塞する無袖の竪穴系横口式石室
1：福岡県名木野竪穴系横口式石室　2：福岡県稲童８号墳

にみられる。ただし，洛東江以東地域の類例は大きくは５世紀後半以降の事例なので，５世紀前半にかぎれば，中西部地域に類例を限定できそうである。北部九州地域では，石積みの袖部を有する事例は多いが，これらは板石閉塞を基本とする。

一方で新興古墳では西短壁の全面を横口部とし，それを板石一枚で閉塞する[(5)]。短壁全面を横口部とする類例は嶺南地域を中心に広く認められるが，それを板石で閉塞するものは，管見では昌寧校洞１号墳以外には確認できなかった。また北部九州地域でも，このような横口構造は「特殊」とされている［重藤 1992］。その中で類例としてみいだせるのは，福岡県名木野古墳群の竪穴系横口式石室［瀬高町教育委員会 1977］や福岡県稲童８号墳・21 号墳［袖石有　行橋市教育委員会 2005］などである（図 10）。

閉塞と蓋石の順序　④の埋葬→横口部閉塞→蓋石設置という順序は，沃野里1号墳と新興古墳の両者で想定されている。筆者もその可能性が高いと考える。ただし，新興古墳の場合は，厚み10cm程の礫混じりの床面形成土が閉塞用の板石の下端部を埋めていることを重視すれば，床面を形成する前に板石が立てられていた可能性も否定はできない。すなわち横口部閉塞→床面形成（埋葬）→蓋石設置の順序である[(6)]。いずれにしろ埋葬行為が蓋石の設置をもって完了している点は，竪穴式石室における埋葬行為と共通する。

洛東江以東地域はむろんのこと北部九州地域でも，埋葬行為の順序は基本的に，蓋石設置→埋葬→横口部閉塞であろう。ただし，例えば上述の名木野竪穴系横口式石室のように，横口部や墓道を備えながらも，その構造が「付随的に施された状態を示し，横口としての機能的な意味をもっていない」［瀬高町教育委員会 1977　4頁］ものも散見される。この名木野の場合は，横口部に板石1枚を設置しその上部に数枚の板石を平積みし，さらにその上に蓋石が設置されている点，床面が礫敷と判断される点などは，新興古墳と類似している。また，横口部と対する東短壁近くに平石を置いて枕石としている点は，沃野里1号墳と同様である。

追葬の可能性　沃野里1号墳については追葬の可能性が指摘されている［이영철 2015a］。南短壁後方の土層断面図をみると，報告書で墓道とされる部分（図8-a）の下部に，墳丘盛土をはさんでもうひとつ通路状の断面をしめす土層（図8-b）がある。その底面は平坦で横口部の底面とほぼ同じ高さなので，これが初葬時の墓道である可能性も考えられる。また，新興古墳でも後に横口部の位置する墳丘を再掘削した箇所が確認され，追葬もしくは一種の儀礼によるものと想定されている。

釘，鋏について　ちなみに鋏や釘という緊結金具も，栄山江流域に新たにもたらされた道具の可能性が高い。金武重［2013］が指摘しているように，中西部や洛東江以西の内陸では，幅広で幅に比して厚みが薄い鋏が主流を占める。それに対し，洛東江下流域や以東地域の鋏は細身で棒状に近いものが大半である。沃野里1号墳と新興古墳で確認された鋏は後者である。

❸……5世紀後葉～6世紀前葉の竪穴系横口式石室

1）石室構造

近年の発掘調査によって，5世紀後葉～6世紀前葉頃と想定される，霊岩泰澗里チャラボン古墳と霊岩沃野里方台形古墳1号墳（石槨墓）において，竪穴系横口式石室が確認された。前者は前方後円墳であり，後者は5世紀前半以降，継続して墳墓として用いられた在地系の方台形墳である。このような対照的な両者の埋葬施設として竪穴系横口式石室が採用されていることは，その被葬者や造営集団の関係を検討していく上での糸口となろう。また，前節で検討した5世紀前半代の事例との構造の上での相関性も明らかにしていく必要がある。この点に注意しつつ，石室構造の基礎的な整理を行いたい。

① 霊岩泰澗里チャラボン古墳［大韓文化財研究院 2015b　図11］

墳丘と石室の関係　後円部中央を掘り込んで設けた墓壙に石室をきずく。墓壙の平面形は東西7.2m×南北5.8m，深さ2mほどで，東南側が突出した偏五角形に近い。

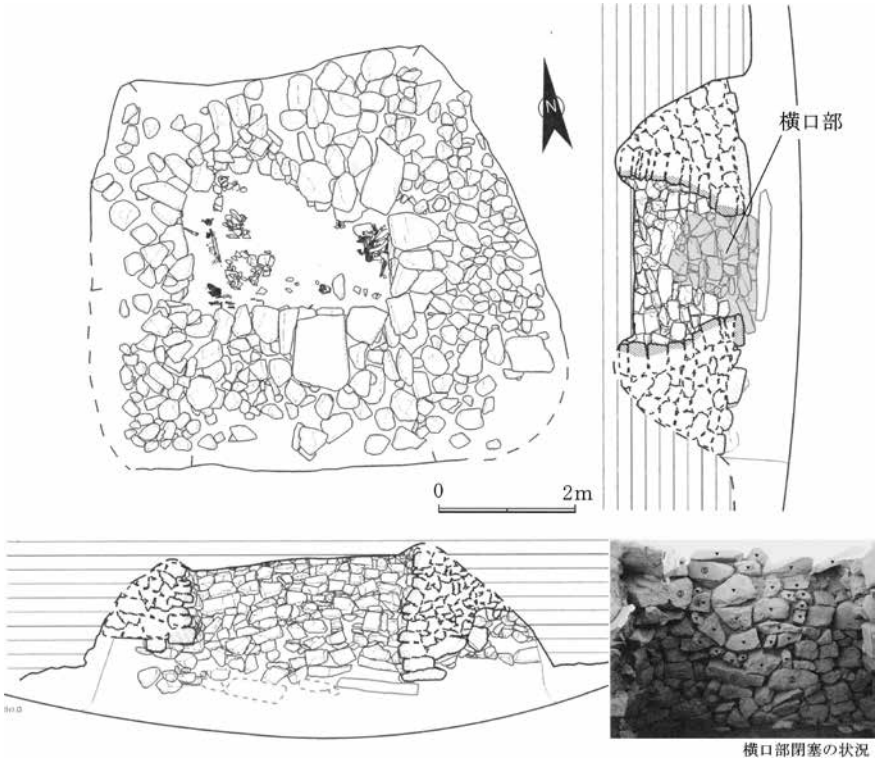

図 11　霊岩泰澗里チャラボン古墳の竪穴系横口式石室

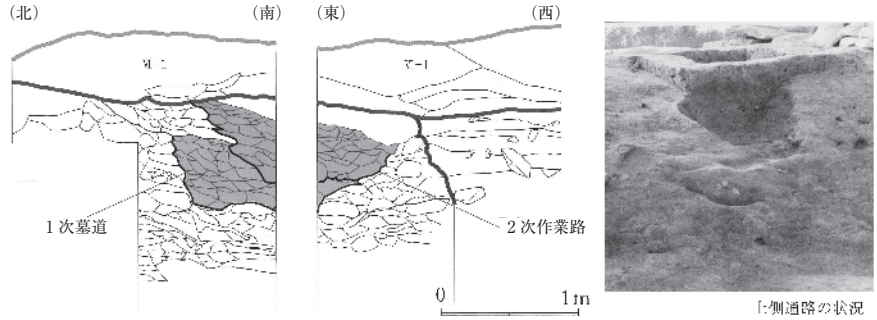

図 12　チャラボン古墳の墓壙東南側で確認された上下の通路

作業路と墓道　石室東南部から東南方向へのびる通路が確認されている。この通路は墳丘を掘削したもので，上下 2 つの通路がある。下側の通路はその床面が横口部の底面と高さがほぼ同じであることから，墓道（1 次墓道）と判断されている。その墓道が埋められた後に同じ位置に掘られた上側の通路については，石室上部の墳丘造成と関連した作業路（2 次作業路）と判断されている（図 12）。

壁体の構造と横口部　石室の壁体は，下から 5 段目までの四壁はほぼ同じ工程の中で積み上げられている。そこから東短壁の横口部底面中央に大型の平石を 2 枚置き，横口部を残して三壁と両袖を持ち送らせながら壁体を構築する。また，壁体背後の控え積みは，東壁にかぎってその上面がそろい，かつ石材の大きさも小ぶりである。これは石室閉塞に伴うものと判断されている。

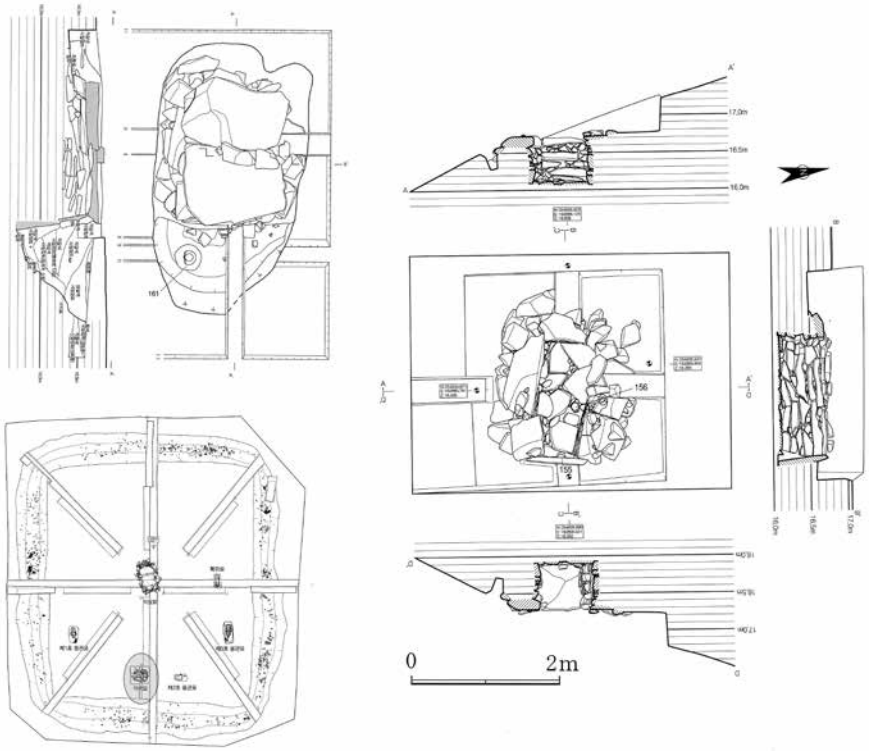

図 13　霊岩沃野里方台形古墳 1 号墳（石槨墓）**の竪穴系横口式石室**

埋葬の過程　報告書では，①墓壙と下側通路（墓道）の掘削，②壁体と横口部の構築，③埋葬，④横口部の閉塞，⑤蓋石の設置，横口部背後の裏込め（閉塞），⑥後円部全体の盛土という順序を想定している。

② 霊岩沃野里方台形古墳 1 号墳（石槨墓）［국립나주문화재연구소 2012・2014a　図 13］」

墳丘と石室の関係　墳丘東辺を掘り込んで設けた墓壙に石室をきずく。墓壙掘削の際に墓道もあわせて掘削。平面形は東西 3.62m ×南北 2m，深さ 1.32m で，隅丸長方形に近い。

墓道　東短壁の背後にやや段をもつ斜路状の墓道をもつ。墓道を除いて石室と墓壙は粘土で密封するのに対し，墓道は赤褐色砂質土で密封する。

壁体の構造と横口部　石室壁体は西短壁→両長壁の順できずかれ，扁平な割石を平積みする。その後，両長壁の東側小口に板石 1 枚を立てかけており，ここが横口部となる。板石の上端は蓋石を設置するために，水平となるように打ち欠きが認められる。

埋葬の過程　報告書に明記されてはいないが，その内容から①墓壙と墓道の掘削，②横口部を除いた三壁の構築，③埋葬（木棺），④東側小口の横口部閉塞，⑤蓋石の設置，⑥石室と墓道の密封と判断される。ただし，石室と墓道では用いられた密封土が明確に異なること，墓道に壺が副葬されていることなどから，「東短壁の 1 枚の板石を最後に立てて築造し，墓道部を通じて追葬が可能な構造であったとみる余地もある」［国立羅州文化財研究所 2012　219 頁］としている。この場合，④と⑤の順序が逆となる。

2）構造の検討と類例

チャラボン古墳の類例　明確な羨道を有する横穴式石室をのぞけば，チャラボン古墳の埋葬施設（石室平面形や壁体）に類似するものとしては，扶余汾江・楮石里12～14号墳［公州大学校博物館1997］，羅州伏岩里3号墳1・2号石室［국립문화재연구소2001］などが指摘されている。原州法泉里4号墳などとあわせて「竪穴式方形石室」［金武重2013　あるいは無羨道石室］や「横口式石室Ⅰ型式」［최영주2013］とよばれる一群である。汾江・楮石里12～14号墳では，段をもつ狭い横口が南または西壁の中央で確認され，13号墳ではその背後に短い墓道状の施設も検出された。伏岩里3号墳2号石室でも，北壁中央に段をもつ狭い横口が想定されている。[(7)] 横口部の構造自体は類似するともいえるが，いずも石室も下半のみが遺存しており，詳細な構造は把握しにくい。[(8)]

石室内における木棺（屍身）の配置について　李暎澈は，チャラボン古墳の石室の大きな特徴として，横口部の向かい側，西短壁に長辺をそろえて鎹で組み合わせた木棺を配置した点を指摘した［이영철2015b］。その類例として栄山江流域において北部九州系の横穴式石室を採用した古墳（木棺や石棺）や，宜寧景山里1号墳［石棺　慶尚大学校博物館2004］，燕岐松院里遺跡ＫＭ－015号（木棺）などを挙げている。

この指摘はきわめて重要で，この観点から上述の類例を検討すると，伏岩里3号墳2号石室でも，横口部向い側の南短壁付近で釘がまとまって出土し，南短壁に沿って木棺が配置されている。また追葬も行われた。そして同1号石室でも，釘の出土状況から東短壁に沿って木棺が配置されており，西短壁側に横口部を想定すれば（註7で指摘），同様の木棺配置となる（図14）。

チャラボン古墳の墓道と作業路　チャラボン古墳では，石室東南側に上下2つの通路がほぼ同じ位置に確認された。その下側の通路は墓道と判断される。問題となるのは，それを埋め戻した後に再掘削して設けた上側の通路である。報告書では，埋葬後に行われた後円部最終段階の墳丘造成に伴う作業路，と想定している。

この場合，墓道掘削→埋葬→墓道と埋葬施設の密封，という順序の後に，墓道と同様の位置に作

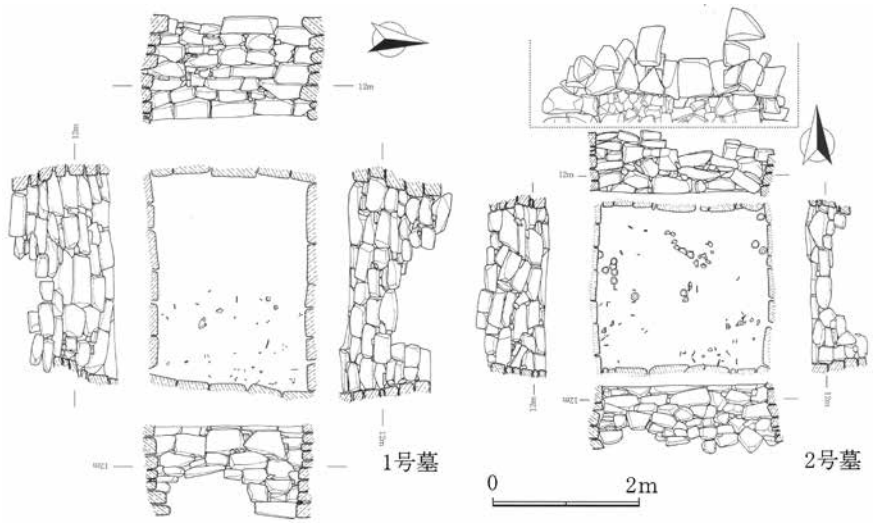

図14　羅州伏岩里3号墳1号墓・2号墓の埋葬施設

業路を再掘削→最終段階の墳丘を造成，という工程となる。確かに，埋葬施設の密封の後に斜面が急角度となる後円部にさらに墳丘を盛土するためには，作業路が必要になると想定される。けれども，それが上側の通路であるかどうかは確定しにくい。上側の通路が墓道とほぼ同じ位置する点，墓道と同様に細かな単位で丁寧に埋め戻されている点などを考慮すれば（図12），あるいは追葬時に改めて掘削された墓道である可能性はないだろうか。

ただし，石室内部では追葬に伴う施設や副葬品が確認されていないことも確かである。調査報告者の見解が最大限尊重されるべきであり，あくまでもひとつの可能性として提示しておく。

❹……竪穴式石室，竪穴系横口式石室の受容と展開
―外来系埋葬施設として

これまで，5～6世紀前葉の朝鮮半島西南部に分布する竪穴式石室，竪穴系横口式石室の構造を検討してきた。それに基づいて，それぞれの歴史的意義について予察してみたい。

5世紀前半の西南海岸地域における竪穴式石室　いずれも倭系古墳と評価しえる古墳の埋葬施設として採用されている。特に，高興野幕古墳や新安ベノルリ古墳の竪穴式石室は，5世紀前半代の北部九州地域における竪穴式石室（石棺式石室も含めて）と構造が類似しており，直接的な系譜を求めることが可能である。また，雁洞古墳の場合，竪穴系横口式石室，もしくはその影響を受けた埋葬施設と評価しえる可能性もある。

筆者は西南海岸地域の倭系古墳の被葬者について，「あまり在地化はせずに異質な存在として葬られたと考えられ，当時の倭の対百済，栄山江流域の交渉を実質的に担った倭系渡来人」と評価している［高田2014　192頁］。このような倭系古墳に採用された竪穴式石室は，基本的には倭系集団が主体となって構築した可能性が高い。

5世紀前半の栄山江流域における竪穴系横口式石室　その一方で，ほぼ同時期に構築された霊岩沃野里1号墳や羅州佳興里新興古墳のような栄山江流域の竪穴系横口式石室は，現状の資料による限り，特定の地域に限定した系譜関係をみいだすことは難しい。すなわち，倭などの他地域から祖形となるものをそのまま移植したとは考えにくい。それよりも，嶺南地域や北部九州地域，中西部地域の石室構築の技術を多様に受け入れ，それを各部位に選択的に取り入れながら，特色のある墓制を成立させたと把握しておくべきであろう。このような意味あいにおいて，霊岩沃野里1号墳や羅州佳興里新興古墳が在地系の方台形墳である点は重要であり，ここに外来系墓制の受容・展開における地域社会の主体性を看取することができよう。

5世紀後葉～6世紀前葉の栄山江流域における竪穴系横口式石室　このような状況は，前方後円墳である霊岩泰澗里チャラボン古墳の竪穴系横口式石室においても認められそうである。石室の全体的な構造は朝鮮半島中西部地域との相関性をうかがえることができる反面，木棺の配置などに羅州伏岩里特3号墳1・2号石室などとの類似性をみいだすこともできる。また，鎹のみで組み立てられる木棺については長辺側が開口していた可能性を指摘し，九州地域の石障との関連を読みとろうとする見解もある［이영철2015b］。

この点において，沃野里方台形古墳1号墳（石槨墓）が竪穴系横口式石室であることの意義もまた大きい。栄山江流域の「多葬」伝統の中で築かれた埋葬施設に，竪穴系横口式石室が採用されて

いるということは，それだけ地域社会にも横穴系の埋葬施設（やそれにともなう葬送儀礼）が定着しつつあったことを示していよう。

おわりに

本稿では，まず5～6世紀前葉の朝鮮半島西南部に分布する竪穴式石室，竪穴系横口式石室の構造について基礎的な整理を行い，類例や系譜関係を検討した。5世紀前半の西南海岸地域に分布する竪穴式石室が北部九州地域との密接な関連性がうかがえる一方で，5世紀前半～6世紀前葉の栄山江流域の竪穴系横口式石室については，他地域から祖形となるものをそのまま移植したというよりも，栄山江流域社会が中西部地域や嶺南地域，あるいは北部九州地域などと活発に交渉をくりひろげる中で受容した墓制と考えられる。その背後に栄山江流域社会の墓制に対する主体性を見出すことは許されよう。

最後に，本稿の石室構造の検討は，現地での観察所見と調査報告書の内容に基づいている。その中で，調査報告書の内容とは異なる見解を提示することもあったけれども，それは詳細な調査報告書が刊行されているからこそ可能であったことを強調しておきたい。

註

（1）――筆者は「倭系古墳」の定義を暫定的に，「朝鮮半島において倭の墓制を総体的に取り入れて造営された古墳」としている。すなわち，墳形，外表施設（葺石や埴輪），埋葬施設，そして副葬品の構成において，倭の墓制の要素が認められる古墳のことを指す。

（2）――「石棺系竪穴式石室」の定義については，短壁や長壁に石材を立てるものに限定する場合と，それに加えて四壁を割石や円礫で積み上げるものを含める場合がある。ここではベノルリ古墳と野幕古墳の石室構造の違いを浮き彫りにするため，前者の定義に従う。

（3）――福岡県糟屋郡神領2号墳第1主体部（宇美町教育委員会1984）も同様の工法だった可能性がある。

（4）――特に藏冨士寛が「福岡（平野）型」（藏冨士2007）とする横穴式石室の平面形と類似する。

（5）――ただし，閉塞にもちいられた板石の高さは両長壁上端よりも低いため，蓋石との間に隙間が30㎝以上生じる。この部分については蓋石設置後に外側から閉塞した可能性がある。これについては李暎澈氏の教示を得た。

（6）――むろん，床面形成土に溝を掘ってそこに板石を落とし込んだ可能性もあり，その場合は報告書での指摘の通り埋葬→横口部閉塞→蓋石設置となる。筆者もこの想定がもっとも妥当と考えているが，あるいは新興古墳の横口部は実際の機能的な意味あいよりも，より象徴的な意味あいが強い可能性もあるのでは，と考えてあえて指摘した。

（7）――伏岩里3号墳1号石室についても，報告書において北長壁あるいは東短壁に横口部が設けられた可能性が指摘されている。それとともに，西短壁に横口部が設けられた可能性も考慮する必要がある。西短壁の壁体写真（국립문화재연구소2001　226頁写真200-2）で観察すると，南寄りにU字形の目地が通る箇所があり，その内部の石材は小ぶりである。この部分が横口部となる可能性はないであろうか。このように考えた場合，後述する木棺との位置関係も整合的に解釈できる。

（8）――その一方で，高敞鳳徳里1号墳4号石室は，石室平面形や，石室の中位（下から4，5段目　標高42.8～43.0ｍ）で四壁に目地が通る点など，チャラボン古墳と比較的類似する。4号石室は竪穴式石室と報告されている（圓光大学校馬韓・百済文化研究所2016）が，特に西壁の上部の積み方が他の三壁に比して粗雑な点，西壁が被葬者の足側にあたり全体的な副葬品配置が横穴系埋葬施設の状況と類似している点，そして西壁背後の墳丘土層断面が調査されていない点などから，竪穴系横口式石室である可能性も残しておきたい。

参考文献

（日本語）
瀬高町教育委員会　1977『名木野古墳群』
宇美町教育委員会　1984『神領古墳群　福岡県宇美町西明寺所在神領 2 号墳の調査』
大野城市教育委員会　1985『笹原古墳』
岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団　2014『天狗山古墳』
小田士雄　1980「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史　講座 4』学生社
亀田修一　1981「朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室」『城二号墳』宇土市教育委員会
金武重　2013「百済漢城期横穴式石室墳の構造と埋葬方法」『古文化談叢』69
藏冨士　寛　2011「玄界灘沿岸」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』九州前方後円墳研究会
重藤輝行　1992「北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景」『九州考古学』67
重藤輝行　1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会
重藤輝行　2007「埋葬施設―その変化と階層性・地域性―」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
志免町教育委員会　1984『萱葉古墳群』志免町文化財調査報告書第 2 集
志免町教育委員会　2001『国指定史跡　七夕池古墳』志免町文化財調査報告書第 12 集
鈴木一有　2014「七観古墳出土遺物からみた鋲留技法導入期の実相」『七観古墳の研究』七観古墳研究会
高椋浩史　2007「石棺系石室を有する古墳」『考古学研究室報告』42　熊本大学文学部考古学研究室
高田貫太　2014「5・6 世紀における百済，栄山江流域と倭の交渉―『倭系古墳』・前方後円墳の造営背景を中心に―」『전남 서남부지역의 해상교류와 고대문화』혜안
辻田淳一郎　2011「九州における竪穴系埋葬施設の展開」『九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
那珂川町教育委員会　1990『カクチガ浦遺跡群』
中間研志　1986「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 6　甘木史書財界原古墳群の調査Ⅱ（Ⅰ地区）』福岡県教育委員会
土生田純之　1991『日本横穴式石室の系譜』学生社
福岡県教育委員会　1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 6　甘木史書財界原古墳群の調査Ⅱ（Ⅰ地区）』
柳沢一男　1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古希記念　古文化論集』下巻
行橋市教育委員会　2005『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第 32 集
（韓国語）
慶尚大学校博物館　2004『宜寧景山里古墳群』
국립나주문화재연구소　2012『영암 옥야리 방대형고분 제 1 호분 발굴조사보고서』
국립나주문화재연구소　2014a『영암 옥야리 방대형고분Ⅱ 제 1 호분 발굴조사보고서 [분구]』
국립나주문화재연구소　2014b『高興 野幕古墳 발굴조사보고서』
국립문화재연구소　2001『羅州伏岩里 3 号墳』
国立中央博物館　2000『法泉里Ⅰ』
公州大学校博物館　1997『汾江・楮石里古墳群』
김무중　2013「百濟 漢城期 横穴式石室의 構造와 調査方法」『동아시아의 고분문화』중앙문화재연구원
김무중　2015「나주 가흥리 신흥고분 출토 철기에 대하여」『羅州 佳興里 新興古墳』대한문화재연구원
김낙중　2012「한반도 남부와 일본열도에서 횡혈식석실묘의 수용 양상과 배경」『韓國考古學報』85
김낙중　2013「5 ～ 6 세기 남해안 지역 倭系古墳의 특성과 의미」『湖南考古學報』45
大韓文化財研究院　2015a『羅州 佳興里 新興古墳』
大韓文化財研究院　2015b『靈巖 泰澗里 자라봉古墳』
대동문화재연구원　2012『대구 달성종합스포츠파크 조성사업부지 내 유적 발굴조사 약보고서』
동신대학교문화박물관　2015『신안 안좌면 읍동・배널리고분군』
東亜大学校博物館　1992『昌寧校洞古墳群』
東義大学校博物館　2008『金海良洞里古墳群Ⅰ』

朴廣春　1988「韓・日 竪穴系横口式石室에 대한 研究」『考古歴史学志』4　東亜大学校博物館
釜山大学校博物館　1986『咸陽白川里 1 号墳』
成正鏞　2009「중부지역에서 백제와 고구려 석실묘의 확산과 그 의미」『횡혈식석실분의 수용과 고구려 사회의 변화』동북아역사재단 연구총서 52
숭실대학교박물관・서울대학교박물관・하국철도시설공단　2004『馬霞里古墳群』
圓光大学校馬韓・百済文化研究所　2016『高敞 鳳徳里 1 号墳 종합보고서』
이영철　2015a「나주 가흥리 신흥고분 매장주체부 구조와 성격」『羅州 佳興里 新興古墳』대한문화재연구원
이영철　2015b「靈巖 泰澗里 자라봉古墳 探究」『靈巖 泰澗里 자라봉古墳』대한문화재연구원
全南大学校博物館　2015『高興 吉頭里 雁洞古墳』
전주문화유산연구원・장수군　2015『장수 삼봉리고분군』
曺永鉉　1994「嶺南地方 横口式古墳의 研究（Ⅰ）―類型分類와 展開를 中心으로―」『伽耶古墳의 編年研究 Ⅱ 墓制』嶺南考古学会
崔完奎　1997「百濟地域 横口式石槨墳 研究」『百濟研究』27
최영주　2013「百濟 横穴式石室의 型式變遷과 系統關係」『百濟文化』48
韓國考古環境研究所　2010『燕岐 松潭里・宋院里遺蹟』
洪潽植　1993「嶺南地域 横口式・横穴式石室墓의 型式分類와 編年」『嶺南考古学』12
洪潽植　1998「墓制의 比較로 본 加耶와 古代日本」『伽耶史論集 1―加耶와 古代日本―』金海市
洪潽植　2001『6～7 世紀代 新羅古墳研究』부산대학교박사학위논문

図出典

（いずれも一部改変）
図 1　筆者作成
図 2　국립나주문화재연구소 2014b・志免町教育委員会 2001
図 3　1：동신대학교문화박물관 2015　2：福岡県教育委員会 1986　3：韓國考古環境研究所 2010
図 4　全南大学校博物館 2015
図 5　那珂川町教育委員会 1990
図 6　1：全南大学校博物館 2015　2：志免町教育委員会 1984　3：岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団 2014
図 7・8　국립나주문화재연구소 2012・大韓文化財研究院 2015a
図 9　国立中央博物館 2000
図 10　瀬高町教育委員会 1977
図 11・12　大韓文化財研究院 2015b
図 13　국립나주문화재연구소 2012
図 14　국립문화재연구소 2001

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2018 年 5 月 24 日受付，2018 年 10 月 1 日審査終了）

Structure of Pit-Type Stone Chambers and Pit-Type Stone Chambers with Side Entrance in the Southwestern Part of the Korean Peninsula in the 5th Century

TAKATA Kanta

Pit-type stone chambers and pit-type stone chambers with a side entrance developed in the southwestern part of the Korean Peninsula between the 5th and 6th centuries. These were burial facilities of a foreign lineage that were different from traditional wooden coffins and burial urns. An examination of the background of their acceptance and development will lead to the clarification, from a microscopic perspective, of the external negotiation activities of regional groups scattered in the Yeongsan river basin or its vicinity at that time. To this end, as part of the primary organization, the structure and genealogy of each case was examined through comparison with cases in Japan and Korea.

As a result, concerning the pit-type stone chambers scattered in the southwestern coastal areas during the first half of the 5th century, it was possible to seek a direct lineage with the pit-type stone chambers of the northern Kyushu region of the Japanese archipelago. It was inferred that there was a high likelihood that the dominant Wa lineage groups who had come to this place had built them. On the contrary, with regard to the pit-type stone chambers with a side entrance, scattered in the Yeongsan river basin, it is difficult to find a genealogical relation limited to a specific region. Instead, it can be inferred that they incorporated various techniques of construction of the stone chambers in the Lingnan region, the Midwest region, and the northern Kyushu region. Thus, a unique tomb system was established by selectively incorporating these chambers in each area. Pit-type stone chambers with a side entrance were developed in the Yeongsan river basin even in the late 5th and early 6th centuries. Tombs that adopted these include the Zenpo-Koen-Fun or large keyhole-shaped tombs and the Takatsuka Kofun tombs of the local system, indicating that the local community was actively establishing the corridor-type burial facilities (and the funeral rituals that accompanied them).

Key words: Pit-type stone chambers, pit-type stone chambers with side entrance, structure and lineage, Three Kingdoms Period, Japan-Korea relations